それからの武蔵

第二巻

それからの武蔵

第二卷
山雨篇

小山勝清

東都書房

© K. Koyama 1964

それからの武蔵　第二巻山雨篇

著者　小山勝清
発行者　高橋清次
印刷所　星野精版印刷株式会社

昭和三十九年四月二十五日発行
昭和四十年十一月二十日第六刷

発行所　東京都文京区音羽町三ノ一九
東都書房
電話・東京(九四二)一一一一
振替口座・東京七二七三二

定価　二六〇円

(製本・若林製本所)

乱丁・落丁の際はおとりかえいたします。

山雨篇

目次

剣と土　七
四浦の里　一九
いけにえ　二九
猟々丸　四一
逆風　五三
山霊　七一
密使　八三
秋風　九五
潮騒　一〇七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

妖魔　一一七
二心　一二九
風楼に満つ　一五五
その日　一七一
山雨　一八三
荒野の決闘　一九七
迷路　二〇九
変中変　二一九
復活　二三五

装幀　川合喜二郎
カット　野口昇明

それからの武蔵

第二巻　山雨篇

剣

と

土

一

武蔵は石舟斎にあうにも、決死の覚悟を必要としたが、今、丸目蔵人佐入道徹斎に教えを乞うにも、戦場にのぞむ心構えで乗りこんだのである。

もっとも、石舟斎は大名で、城内の奥深くすんでいるので、近づくことそれ自体が難しかったが、徹斎は一農夫、すでに眼前に姿をあらわしている。

だが、そのふところにとびこむことは容易の事ではないらしい。武蔵には徹斎がすむ茅屋が、黒鉄の砦にも見え、同時に又、全く武具のそなえのない平和の殿堂にも見えたのである。

神瀬軍助を先頭に、武蔵をしんがりにして、四人は野中の一本路をしずかに進んだ。門とてない屋敷の入口、よくふみかためられた庭、今しも、田んぼからもどった徹斎が、向うむきに立っていた。

「老師」

軍助が、頭をさげて呼んだ。

「お早うございます」

木野と小田が同じくあいさつした。武蔵は、二、三間もうしろに、少し頭をたれて、神妙に立っている。

徹斎は、ゆっくり向きなおった。手には前のように鎌と杖をもっている。

日やけした赭顔、胸のあたりまで垂れた白髯、脊丈は五尺二三寸、すこし腰がまがっているだけで、まだ七十三歳の老翁とは見えぬ。子供のような無心の眼をほそめて、

「おう、きたか」

と、声をかけた。

「早朝、おじゃまして相すみませぬ」

軍助が、応対役にあたる。徹斎には、三人の弟もあったが、タイ捨流の跡目をついだのは、この神瀬軍助である。

「みな、無事か？」

「はい、殿をはじめ、清兵衛様、寿斎様、吉兵衛様、ことごとく御無事で」

「なにしに参った？」

徹斎は、弟子たちの顔を見まわした。

「はっ、実は、諸国武者修行の兵法者、宮本武蔵殿が、ぜひ老師にお目にかゝり、二刀流兵法について

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

御教示にあずかりたいとの御希望、清兵衛様の御下命によって同道いたしましてございます」

軍助は、こういって道をあけ、

「あれなる御仁でございます」

と手をあげた。武蔵は頭をさげた。徹斎は、きょとんとして武蔵を見たが、

「なんじゃい？」

といって、耳に手をあてた。

「はっ、実は、諸国武者修行の兵法者――」

軍助は、同じ口上をくり返した。

「なんじゃい？　道にまよった侍をつれてきたって。そんなら、朝飯でもたべさしてやるがいいぞ」

門弟たちは顔を見合わせて、苦笑した。徹斎得意の勝手つんぼが始まったのである。

二

徹斎の勝手つんぼに、門弟たちは、またかとばかり顔を見合わせたが、武蔵は笑えなかった。武蔵はこの半生の間に、いくたびとなく、強敵に出あい、その鉄壁の構えにぶつかったが、徹斎の勝手つんぼは、そのいずれよりも固いように思えた。

無孔の鉄耳である。聞いて聞かぬふりをして空とぼけている。そうした世俗にいう勝手つんぼではない。鉄火の修練の末かち得た鋼鉄の意志！　それが聴覚を支配しているのである。聴くまいとすれば、ほんとうに聾してきこえなくなる。武蔵は、しゅん間、こう見てとったのである。

城門をへだてて、とりつくしまもなかった柳生石舟斎！　水際に立ちはだかった、あの日の佐々木小次郎！　ちらと、その姿が目の底をよぎった。

「いかにして、この鉄耳にあなをあけるか？」

武蔵は、心気をすまして、じっと丸目徹斎を見返した。底知れぬ闘志に、両眼は例の黄色の光をはなって、まっすぐ徹斎を射た。徹斎が、にやりと笑った。

とたんに、武蔵の目から、すうと光が消え、くるりと足を返し、屋敷の外へゆうゆうと歩きだした。そこには、両者の間に間髪を入れぬ虚実の戦いがあったが、門弟たちにはわからなかった。

「あっ、宮本先生！」

年若の小田が叫んだ。神瀬も小田も、てっきり、

武蔵がおこって立ち去るのだと思い、あわてて、あとを追おうとした。と、徹斎がいきなり大声で笑いだした。

「うあっ、はっ。あの仁、腹はすいていないと見える。うあっ、はっ、はっ」

そして、この笑い声は、二人の足をくぎづけにしてしまった。

「さあ、お前たちもはいれ。久しぶりじゃ、茶がゆでも馳走しよう」

徹斎は、こういって、家の中にはいった。三人はしかたなく、師のあとにつゞいた。球磨農家のならわしとして、夏とはいえ、囲炉裡には火がもえ、大きな茶がゆの鍋が、自在鍵にかけてあった。

家族は、七十近い老妻と、二十歳前後に見える次女のお貞、それに、女中と下男を加えて四人である。徹斎は、男の子にめぐまれなかった。長男の権内は早世し、次男の半十郎は、資性が奸悪で、いつも徹斎のいいつけにそむき、世に迷惑をかけることが多かった。そこで徹斎は家来どもに命じ、猪狩りにことよせて、白髪岳におびき出し、これを殺してしまった。五十二三歳頃のことである。こうしたことから察しても、徹斎が壮年の頃などは、いかに気性がきびしかったかがわかる。

この切原野に隠居してからも、徹斎は、悟りすました世捨人になりきることはできなかった。彼は書道にも達し、青蓮院宮の免許をうけていた。又、茶道にも通じていたが、風流に生きることもできなかった。

剣を鍬に代えて、土地にいどむ。これが、徹斎にとって人生修行、最後の段階であった。そして得たところの兵法の一つが、勝手つんぼではなかったろうか？　むろん、これも常人の達しがたい悟りの一境地にちがいない。

三

朝げをすますと神瀬軍助が、顔色をうかゞいながらきり出した。

「老師、さきほどの宮本武蔵と申す兵法者は」

「ほう、どんな男かの？」

徹斎は上乗の気げんだ。眼をほそめてきく。

「はい、作州の浪人で当代第一流の兵法者、十三の

時、新当流の名人、有馬喜兵衛と試合をしてこれをたおして以来、足利将軍家の師範、吉岡兄弟をくだし、又本年に入っては小倉細川家の佐々木小次郎を一撃をもって絶命させるなど、百戦百勝、いまだかつて敗れたことのない剣豪にござります」

「なるほど」

「またこの兵法者は、二刀を使うことでも有名で、世間では、この流の元祖だと呼んでおります。しかるに本年、長崎にて、先年老師より指南をうけた木島藤左衛門の身内の者が、わが流の二刀流を使うのに出あい、兵法熱心のあまり、老師をたずねて参ったとのことでございます。われ等としても、ぜひ彼の二刀流を見たいと存じます。一応、彼の乞いを入れて御接見くださるよう、わたくしどもも、お願い申します」

「軍助！」

徹斎の眼が鋭く光った。

「手ぬるいぞ軍助！　なんで相手をしんしゃくする？　武蔵の修行は武蔵がする。彼は彼、われはわれじゃ。彼の二刀流が見たかったら、なぜ、そなたが、試合をいどまぬ。あの男、そなたの力添えなくば、修行できぬほどの、弱虫ではないぞ！」

「はっ」

他の二人も平伏した。

「おくれたか軍助！」

「はっ、軍助、不覚でございました。これより追っかけて！」

「うむ、それもよかろう。だが、そちたちの眼で、あの男が見つかるかなあ？」

「なに、まだ遠くへは行きますまい。木野、小田、つゞけっ！」

神瀬軍助を先頭に、三人は外にとび出した。徹斎は見おくって、

「あわて者めが！　あの音が聞えないのか」

とつぶやいた。そして娘のお貞に、

「床の間の袋をもってこい」

「はい」

お貞が持ってきたのは、古びた刀袋。徹斎は、中から大小二本の木太刀をとりだした。もう長いこと使わぬが、ぬりあげたように色づいている愛用の木太刀である。

左利きの徹斎は、長刀を左に小刀を右にひっさげ

て、すっくと立ちあがった。いくらか曲っている腰も、まっすぐにのび、顔は紅潮して、眼はふだんの倍ほども大きくけいけいと燃えた。

老妻のお八重は、おびえたように、お貞と顔を見あわせた。

「あなた、どうなさいました」

「……」

「お父さま！」

「聞えぬかお貞？」

お八重と、お貞は耳をすました。

「まあ、ほんとに、何でしょう？」

どこからか、何かをけずるような音が、かすかに聞えてくる。

四

徹斎は庭におり立ち、両手に木太刀をひっさげ、りん然として音のする方へ迫っていった。母家とうちちがいに一棟の家がある。うまやとしのぐらである。

そのうしろで、武蔵が、悠々と短刀を使って木太刀をつくっていた。材料はやんもこ（まぐさなどをかつぐ樫のてんびん棒）らしい。音はまさしくこれ。

そこへ徹斎が、つゝうと近づいて大喝した。

「横着者、見つけたぞっ！」

「おう！」

武蔵がうけて、すっくと立ち上った。手には作りかけの木太刀、その顔は、カッと喜びにもえたが、それは一しゅん、たちまちにして死闘の様相に変った。痛烈無比、中段に構えた徹斎の二刀が、殺気をはなって、ひたひたと迫ってくるのだ。武蔵は、とっさに木太刀を上段にふりかぶると見るや、間髪を入れず、地をけって、

「えいっ！」

と、打ちこんだ。それは相手にすきがあったからではない。相手の殺気を粉砕する強引の一撃である。鉄耳の徹斎をみごとおびきだし得たと思う一しゅん、よろこびに後手となった武蔵が、逆をついた転機の豪刀だった。

「おう、獅子剣！」

徹斎はさけんで、さっととびのいた。武蔵の一刀は空に流れたが、これで双方の構えは、五分々々に

なった。とたんに徹斎は左手の大刀を上段にふりかぶり、さっとなゝめに振りおろした。その一刀はかちん！　と音がして武蔵の木刀の峰を撃った。武蔵は手先がしびれ、木刀をとり落そうとしたが、あやうくこらえ、手を返して、まっこうから打ちかかった。と、徹斎は右剣ではらいのけ、さっと左剣でうちこんできた。武蔵は、これをひきはずして、

「えいっ！」

自信の一撃、正面からうちかゝると、徹斎はぴたりと十字でうけとめたが、しゅん間、右剣をひいて武蔵の一刀を左に流した。あぶない、左剣がせまる！　武蔵は、ぱっと飛びのいた。とこの時徹斎は、

「武蔵、とれっ」

と叫んで、いきなり右手の小刀を、武蔵をのぞんでなげつけた。

「おう」

武蔵はこたえて、左手でその小刀をひっつかんだ。

今や武蔵は二刀、しかし徹斎は、くるりとうしろをむけ、

「武蔵、かゝれ！」

とよんだまゝ、すたすたと歩きだした。そこは、母屋との間のせまいせどあい。武蔵はしばらくためらった。二刀を振うには、あまりにせまく死地に等しい。

「武蔵おくれたか！」

「はっ」

武蔵は、とっさに覚悟した。そして両刀を中段にかまえたまゝ、そのせどあいにふみこんだ。

「不動剣」

徹斎が、おくでつぶやいた。

五

徹斎は、せどあいの出口に、木太刀を頭上に横たえて立ちはだかった。タイ捨流独特の構えである。右へうちおろせば高妙剣、左にふれば風勢剣。武蔵は、両刀を中段に構え、徹斎の呼吸をよみ、間をふみながら、しずしずと迫っていく。

いよいよ出はずれ、常人ならこゝで一たん、足をとめて気合をうかゞうところだが、武蔵はいきなり、とび出して、さっと右剣をふりかぶった。これ

は徹斎の意表をついだ攻撃だ。間一髪、武蔵は、みごと拍子にのって懸りの先をとったのである。

「やっ」

虚をつかれた徹斎は、ひらりと十尺ほどもうしろにとびのいた。一撃ち！　武蔵も地をけっておどりかゝったが、とたんに徹斎はくるりと後向きになった。

「あっ」

そのしゅん間、武蔵は徹斎の姿を見失い、穴の中に落ちこみそうな気がして、あやうく踏止まった。

「真無の剣！　剣刃の上馬走り、火焔の裏身を蔵す」

徹斎は、こうつぶやいて、すたすたと歩き出した。老妻のお八重と、娘のお貞が、眼を見はってたたずんでいる。徹斎は、その前で、木太刀をすて、鍬をひっつかんだまゝ、どんどん屋敷の外へ歩いていく。やがて野路。

武蔵は、そのあとを追った。まだ試合は終っていない。徹斎の剣気がひたひたとせまってくるのである。もし、武蔵が闘志をおさめ足をとめたら、しゅん間、徹斎の鍬がとびかゝってくるだろう。

「たゞの一撃！」

武蔵は、闘志にもえ、豹のように、徹斎の呼吸をうかゞい、歩調のすきをねらった。しかし徹斎にすきはない。その一歩々々が鉄壁のようで、ふみこむことができぬ。

徹斎は、ふり返ろうともせず、どこまでも野道を歩いていく。武蔵は心気をしずめて、歩調の間をよみとり、そのすきをふんで、おどりかゝろうとするが、徹斎の歩調は千変万化、全くうかゞいよることを許さない。見たところ、変らぬ歩調でゆっくり歩いているが、ある時は磐石の上を往くごとく、ある時は薄氷の上を往く、風吹けば風に乗り、松籟の音律におどる。うち寄する波の間をふむかと思えば、漂々として虚空を遊行する。

行くほどに、夏の日はかんかんと照りつけ、あせりにあせった武蔵の全身は、汗にぬれ、顔は蒼白、眼だけが異様に熱している。

こうして野道から往還、村をすぎ、森をぬけ、西に下ってゆくと、こゝはまた切原野にまさる広々とした原野の只中に出た。その青草原に、黒い地はだを見せたわずかばかりの開拓地！　その前に徹斎が足をとめた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo